

権実相對

—四十四年未見真実—

釈尊の教説を総合的に判釈はんじやくする方法に、「大小相對だいしょうそうたい」と「権実相對ごんじつそうたい」があります。小乗教より大乘教の方が勝れていることは、先に述べましたが（本紙九一九号）、その大乘教に権と実があり、権とは、仮の教えを施ほどこすことであり、実とは仏の真実の教えということです。これは天台大師が三種の教相の中で示された判釈ですが、大聖人はこれを依用えゆうされ、『開目抄』に、

「但ただし仏教に入はいって五十余年の経々、八万法蔵はちまんほうぞうを勘かんへたるに、小乗あり大乘あり、権経あり実経あり（中略）但し法華経計り教主釈尊の正言なり。三世十方の諸仏の真言なり」（御書 五二六）

と示されるように、五重相對判の中で、法華経にぜんぎょうと爾前経にぜんぎょうを比較して、その勝劣を明かし、権実雜亂した当時の仏教界を破折されています。

そこで今回は、法華経に説かれる教えと、爾前権経で説かれる教えの違いについて述べます。

約部奪釈やくぶだつしゃくの円

まず第一の違いは、法華経で説かれる円理と、爾前経の円理との相違が挙げられます。仏の出世ほんがいの本懐は、声聞しょうもん・縁覺えんがく・菩薩の三乗を、等しく一仏乗に帰せしめることにあります。すなわち、三乗それぞれが機根きこんの相違によって、同じ教えを聞いても、受け取る内容に違いがあれば、真実の成仏にはなりません。それ故、その機根ととのを調ととのえるために、仏は種々の方便をもって、真実の教えを聞くに耐えられるまでの状態にしました。それが、爾前経の中で説かれる方便の教えです。

「四教しきょう」の中でも詳しく説明しましたが（本紙九二五号）、天台大師は五時八教判ごじはつきょうはんの中で、法華経とそれ以前の諸大乘経との内容の相違を、詳しく明かしています。

それによりますと、五時のうち、初めに説かれた華嚴経けごんには、別教べつきょうと円教えんぎょうの教理を兼ねたもの（兼）が説かれています。

第二時の阿含経あごんは円教は説かれず、ただ小乗しょうきょう・蔵教ぞうきょうのみの教えを説いたもの（但）です。

第三時の方等経ほうどうには、小乗と大乘の相違を明らかに説き、小乗に執着しゅうじやくするものを厳しく叱る（彈呵）だんかことを説き、それに蔵・通・別の三教と円教とを比較、対説したもの（対）たいが説かれています。

第四時の般若経は淘汰の教えと言われ、円教に通・別二教を帯びたもの〈帯〉が説かれています。

これらに対して、法華経では、『方便品』において、十如是を説いて諸法実相・三諦円融の法理〈純〉を説き明かしています。これこそ蔵・通・別の方便を一切含まない、純円一実の教えであり、森羅万象すべてのものの真実の相を明確に示したのと言えます。

爾前の円にも与えて肯定的に円融相即が説かれているので、法華・爾前同一の円とするのが約教与釈であり、反対に爾前の円は方便を兼帯していることから円の本義がなく、法華のみ純円独妙として見るのが約部奪釈です。

二乗作仏を明かす

第二番目の違いは、二乗の成仏が説かれているか否かということです。

三諦円融の理を天台大師は一念三千の法理によって示しましたが、この三千とは何をもとに説き出されたものかと言えば、華嚴経の十界・法華経の十如是・大智度論の三世間によったものです。十界各々互いに相具して百界となり、その各界に十如是を具えて千如是、さらに三世間を具えて三千世間となり、一念三千の数量が定まります。

華嚴経には、十界の名称が説かれてはいますが、声聞・縁覚の二乗の成仏は説かれていません。この成仏が約束されなければ、十界互具が成り立ちません。華嚴経ばかりでなく、法華経以前の諸大乘経には、すべて二乗の成仏は説かれていないのです。

しかし、法華経迹門に至って、具足の通として初めて具体的に、未来に二乗が成仏する記別を説き明かしました。これによって十界の生命ことごとく成仏する実義が顕われ、仏界と九界が互いに融じて、十界互具・百界千如・一念三千の法相が成り立ちます。

ですから、華嚴・大論は死の法門、法華の十如是は活の法門とも言われるように、十如是、二乗作仏が説き明かされ、法華経の円融具足に基づく開会によって、初めて華嚴の教理や、大論の法理が衆生救済の原理として活かされるのです。

久遠実成を明かす

第三番目の相違は、仏の始成正覚と久遠実成という点です。これは本迹相對の法門として論じられることでもあります。

法華経以前の諸大乘経は、すべて十九出家、三十成道の、いわゆる始成正覚の釈尊の説法です。仏の寿命が永遠でなければ、私たちの成道も無常のものとなります。そこで法華経本門『寿量品』において釈尊は、久遠五百塵点劫の本地を顕わし、仏の寿命が永遠なることを示したのです。これによって一念三千の法理が、過去・現在・未来の三世に亘る、時間的永遠性の上に現証をもって証明されたのです。

例えば、大日経で説く「我一切本初」などは、法華経に顕わされた法身・報身・応身

の三身具足の仏などではなく、単なる法身という、宇宙本来のありのままの理体仏に過ぎません。これには、衆生を教化する智慧（報身）もなければ、その力用（応身）も具わっていません。それを、大日経にも法華経で説く久遠実成の法門があるとするのは、善無畏をはじめとする真言諸師が、法華経の義を盗み入れた邪説に過ぎないのです。法華経『寿量品』の五百塵点劫の開顕は、久遠の昔から、三身相即の仏の常住を明かしているもので、爾前権経には全く見られなかったことです。



以上のように、法華経が他の一切の諸経に勝れている所以は、天台大師が余すところなく説き示し、妙楽大師がさらにそれを詳釈し、大聖人も『開目抄』に、

「華嚴乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり。此等の経々に二つの失あり。一には『行布を存するが故に仍未だ権を開せず』と、迹門の一念三千をかくせり。二には『始成を言ふが故に曾て未だ迹を發せず』と、本門の久遠をかくせり」(同 五三五)

と示されているように、本迹相對、種脱相對の序説としてこれを用いられました。

しかしこの相對判で示される一念三千の法門は、あくまでも理の法門です。私たちの成仏は、大聖人の種脱相對によって明かされる、事の一念三千の法門によってのみ可能となるのです。

五重相對の図

